

あんな本・こんな本

2023年10月10日発行 No.89

ボランティアによる新着図書・資料案内

この号では女性教育情報センターに2023年2月～7月に新しく受け入れた資料の中から、ボランティアが選んだ本を紹介します。新着の全資料は下記の文献情報データベースからご覧いただけます。

https://winet2.nwec.go.jp/bunken/cgi/newbook_cal/opac_newbook_cal.cgi

読んでみました

ヤングケアラー先輩たちの体験談(みんなに知ってほしいヤングケアラー 4)

小林真理菜編 ; ポプラ社 2023年

[リストNo.31]



この本には5人の体験談が書かれている。立場や境遇、経緯に違いはあれ、共通しているのは、家族の生活の世話をほぼ一人で担っていることだ。それは1日たりとも逃れられない現実であり、さまざまな不安を抱える毎日だ。その当事者たちが、心を開ける場所を見つけ、未来に希望を持つことができるようになった体験が綴られている。

分かりやすい表現で書かれ、厚生労働省の相談窓口や、相談を受け付けている各種団体などの連絡先が掲載しており、この問題に悩んでいる人にとって、助けになるに違いない。

しかし気になるのは、自分がヤングケアラーだと気づかず成長する人もいるという事実だ。5人の内のひとり、養護教諭として仕事をするようになってから、子どもたちのために参考になるだろうと出席した講習会で、初めて自分こそがヤングケアラーだったと気づいた、と話している。

理想は、困っている人を見落とすことなく見守ることができる社会を築いていくことではないだろうか。

[CO]

女ことばってなんなのかしら? : 「性別の美学」の日本語

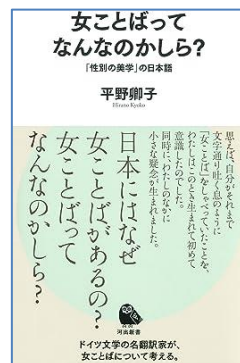
平野卿子著 ; 河出書房新社 2023年

[リストNo.39]

翻訳家という言葉に対して人一倍センシティブな職業の著者が言葉における性差別について考察している。まず表題の「女ことば」。実生活では死語と化しているのに、小説の中の女性は相変わらず「～だわ」などと言っている。著者は識別ツールとしての「女ことば」はあってもいいという。日本語は構造上会話が誰の言葉かわかりにくい。そこで、「わしは…じゃ」(老人)などと役割語を使って発話者を示す機能があるからだ。問題は、「立場を弁えた^{わかま}」女らしい言い回しなのだ。「私はこう思う」とはっきり意思表示せず、「あなたもそう思わない?」などと遠回しにいう。これこそが強者対弱者という力関係を反映しているのだと著者は指摘する。

「女ことば」だけではない。著者は言葉にちりばめられた性差別の数々を、これでもかとばかり列挙する。いくつか拾ってみよう。

- ・少女/少年(少男でなく)、王女/王子(王男でなく) = 男が標準、女が変種という扱い
- ・日本語の一人称は多様だが、俺、僕、小生、(余、吾輩なんてのも)すべて男性用。女性用は「わたし」(男も使える)とその変種のみ。



・女偏の漢字は無数にあるが、男偏の漢字はない。人偏があるからだ。つまり男＝人なのである。最後に女性にあるまじき「悪態」について。著者は昔ある小説を翻訳していたとき、自分が訳した「とっと失せろ、この野郎！」という悪態に胸がスカッとしたという。これが著者が、男言葉の効用、つまり言葉における男の特権に気が付いたきっかけだった。毎日何気なく使っている言葉に埋め込まれた性差別を洗い出してくれた本であった。 [YK]

歴史をこじらせた女たち

篠綾子著；文藝春秋 2022年

[リストNo.3]



もしこの人がいなかったら歴史はどうなっていたらと思うられる女性たちの様々な生き方を紹介した一冊である。

登場するのは、古代のロイヤルファミリー、華やかな王朝物語を生きた女性、平安から室町時代に仁義なき戦いを繰り広げた「悪女」、またはスキャンダルを提供した江戸時代の「猛女」など33人。小野小町や北条政子といった有名人のほか、一般には馴染みの薄い光仁天皇の皇女・酒内内親王などが含まれる。

生まれ育った時代や環境に翻弄されつつも、しなやかに且つしたたかに生き抜いたさまが、現代とも繋げながら記されている。千年以上も昔から、我が子や連れ合いのためには信念を曲げてでも生きてきた女性の多いこと！ それはこれからの時代も変わらないのだろうか？と思いつつ本を閉じた。

なお、著者と歴史との出会いは「学研まんが人物日本史」で、20冊のシリーズで取り上げられた女性が卑弥呼と紫式部の二人だけだったことに子ども心にも疑問を抱き、日本を揺り動かした女性はもっといるはずだ、と研究を始めたというエピソードには驚くと共に感心した。 [MN]

占領期女性のエンパワーメント：メアリ・ビーアド、エセル・ウィード、加藤シヅエ

上村千賀子著；藤原書店 2023年

[リストNo. 21]

NWECの職員であった上村千賀子氏の新著が上梓されたので紹介したい。

本書は、著者の前著『メアリ・ビーアドと女性史』（藤原書店、2019年）の続編といってもよいと思う。ビーアドは1920年代から日本の女性運動や活動家に関心を持ち、とくに加藤シヅエとは、英語版の自伝刊行を支援するなど深い関係にあった。

敗戦後間もない1945年10月、GHQは五大改革指令を発表、その筆頭に掲げられたのが「女性解放」である。このことを知ったビーアドはGHQに接触し、軍政部の女性政策担当者エセル・ウィード中尉を紹介された。ビーアドは日本の女性解放運動の歴史、指導者などの情報をウィードに伝え、ウィードもビーアドに積極的に助言を求めた。その結果、彼女は「女性参政権は戦前からの婦選運動の賜」という認識を持ち、加藤シヅエをはじめ、山川菊枝などを起用し、責任と主導権を日本の女性たちが持つように努力した。

この著は、いわば、ビーアドを“メンター”として日米の女性たちが協力して女性政策を作り上げていった物語である。書簡や日米の新聞記事など豊富な一次資料を使った丹念な検証から、当時の女性たちの改革への情熱、労働省婦人少年局の設立をめぐる攻防、GHQとの交渉の実態などが浮かび上がってくる。

本書の第二部は『日本女性史』出版がテーマである。戦前、世界の女性の「エンサイクロペディア」の制作が国際的な規模で企画された。この企画は戦争の開始などにより頓挫したが、ビーアドの要請に従って日本の女性たちが担当した古代から近代まで様々な分野で活躍した女性の「素描」をもとに、ビーアドが自らの歴史観（女性が歴史を動かす力をもっていたとする）に基づき、日本の女性たちを勇気づけようとする企図のもとに執筆した。その困難に充ちた経緯を、ここでも著者はビーアドとウィードの往復書簡に詳しく語らせている。この本は、1953年、ようやく加藤シヅエらの訳により『日本女性史』※として、河出書房から出版され、ビーアドの最後の希望は実現したのであった。



※国会図書館所蔵。同館デジタルコレクションにも収蔵されており、オンラインで閲覧可 (<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3045080> 要利用者登録)
なお、「復刻日本女性史叢書」第22巻昭和期11（クレス出版）に収録（当館所蔵。請求記号：210/F73） [YK]

2023年2月～7月に情報センターが新たに受け入れた図書からボランティアが選んだ本です。

	書名・副題 / 著者・編著者名	出版社	出版年月	請求番号
1	わたし×IT=最強説：女子&ジェンダーマイノリティがITで活躍するための手引書 Waffle著	リトルモア	2023.3	007/W47
2	いいね!ボタンを押す前に：ジェンダーから見るネット空間とメディア 李美淑 [ほか] 著	亜紀書房	2023.2	007.3/I27
* 3	歴史をこじらせた女たち 篠綾子著	文藝春秋	2022.9	281/R25
4	わたしは反対!：社会をかえたアメリカ最高裁判事ルース・ベイダー・ギンズバーグ デビー・リヴィ文；エリザベス・パドリー絵；さくまゆみこ訳	子どもの未来社	2022.11	289/W47
5	市川房枝、そこから続く「長い列」：参政権からジェンダー平等まで 野村浩子著	亜紀書房	2023.4	289.1/I14
6	猿橋勝子：女性科学者の先駆者(はじめて読む科学者の伝記) 清水洋美文；野見山響子絵	汐文社	2021.3	289.1/Sa69
7	なぜ豊岡は世界に注目されるのか 中貝宗治著	集英社	2023.6	318/N59
8	流山がすごい 大西康之著	新潮社	2022.12	318.2/N19
9	教育・ジェンダー・安全な水とトイレ(やさしくわかる17の目標SDGsおはなし絵本；2.ひと；2) 松葉口玲子監修	学研プラス	2022.2	333.8/Ky4
10	「わたし」から始まる社会学：家族とジェンダーから歴史、そして世界へ 平井晶子[ほか]編	有斐閣	2023.3	361/W47
11	何が問題?格差のはなし：「おいてけぼりの誰か」をつくらない世界のために 山田昌弘監修	Gakken	2023.2	361.8/N48
12	クリエイティブであれ：新しい文化産業とジェンダー アンジェラ・マクロビー著；田中東子監訳；中條千晴ほか訳	花伝社	2023.2	366/B31
13	地域からみる女性のライフ・キャリア：主体的に働き方・生き方を選択できる社会の実現のために 小倉祥子著	ナカニシヤ出版	2023.3	366.38/C43
14	おしゃべりから始める私たちのジェンダー入門：暮らしとメディアのモヤモヤ「言語化」通信 清田隆之著	朝日出版社	2023.6	367/O75
15	ジェンダーがよくわかる本：多様性の時代のリテラシー 瀬地山角, 中村圭著	秀和システム	2022.12	367.2/J36
16	『女の子だから』のない世界へ：おしえてジェンダー! ブラン・インターナショナル・ジャパン著	合同出版	2023.5	367.2/O66
17	パパはどこ? クレール・ガラロン絵と文；依布サラサ訳；北原みのり解説	アジュマブックス	2022.11	367.2/P22
18	性差別の損失：なぜ経済は男性に支配され、女性は排除されるのか リンダ・スコット著；月谷真紀訳	柏書房	2023.5	367.2/Se19
19	おまえが決めるな!：東大で留学生が学ぶ《反=道徳》フェミニズム講義 嶋田美子著	白順社	2023.4	367.21/O61
20	女らしさは誰のため? ジェーン・スー, 中野信子著	小学館	2023.6	367.21/O66
* 21	占領期女性のエンパワーメント：メアリ・ビーアド、エセル・ウィード、加藤シヅエ 上村千賀子著	藤原書店	2023.3	367.21/Se72

22	たまたま生まれてフィメール 小川たまか著	平凡社	2023.5	367.21/Ta79
23	被害と加害のフェミニズム：#MeToo以降を展望する クオンキムヒョンヨン編著；影本剛，ハンディディ監訳	解放出版社	2023.1	367.221/H55
24	デジタル化時代のジェンダー平等：メルケルが拓いた未来の社会デザイン 佐野敦子著	春風社	2023.3	367.234/D54
25	ホワイト・フェミニズムを解体する：インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史 カイラ・シュラー著；飯野由里子監訳；川副智子訳	明石書店	2023.1	367.253/H96
26	「イクメン」を疑え！ 関口洋平著	集英社	2023.4	367.3/I38
27	男尊女卑依存症社会 斉藤章佳著	亜紀書房	2023.7	367.5/D38
28	10代のための性の世界の歩き方 櫻井裕子著；イゴカオリ漫画	時事通信出版局	2023.4	367.99/J88
29	災害と性暴力：性被害をなかったことにしない、させないために。 Nursing Todayブックレット編集部編集；小川たまかほか執筆	日本看護協会出版会	2023.1	368.6/Sa17
30	「助けて」と言える社会へ：性暴力と男女不平等社会 大沢真知子著	西日本出版社	2023.5	368.6/Ta93
* 31	ヤングケアラー先輩たちの体験談(みんなに知ってほしいヤングケアラー / 小林真理菜編；4) 小林真理菜編	ポプラ社	2023.4	369/Mi44
32	スカートと女性の歴史：ファッションと女らしさの二〇世紀の物語 キンバリー・クリスマン=キャンベル著；風早さとみ訳	原書房	2023.4	383.1/Su54
33	オスとメス=進化の不思議 長谷川真理子著	筑摩書房	2023.2	467/O79
34	中絶と避妊の政治学：戦後日本のリプロダクション政策 ティアナ・ノーグレン著；塚原久美，日比野由利，猪瀬優理訳	岩波書店	2023.2	498.2/C69
35	「ものづくり」のジェンダー格差：フェミニイズされた手仕事の言説をめぐって 山崎明子著	人文書院	2023.5	594/Mo35
36	ギャラリーストーカー：美術業界を蝕む女性差別と性被害 猪谷千香著	中央公論新社	2023.1	704/G99
37	女子マンガに答えがある：「らしさ」をはみ出すヒロインたち トミヤマユキコ著	中央公論新社	2023.5	726.1/J78
38	自転車と女たちの世紀：革命は車輪に乗って ハナ・ロス著；坂本麻里子訳	Pヴァイン	2023.2	786/J55
* 39	女ことばってなんなのかしら?：「性別の美学」の日本語 平野卿子著	河出書房新社	2023.5	814/O66
40	ジェンダー×小説ガイドブック：日本近現代文学の読み方 飯田祐子，小平麻衣子編	ひつじ書房	2023.5	910.2/J36



*印の本は

読んでみました

に感想文を掲載しています。

連絡先：〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

国立女性教育会館（NWEC）

ボランティアルーム内「あんな本こんな本」担当